

スピリチュアリティ研究における SCATの特徴と課題の一考察

賀戸一郎・夏秋圭助¹

A Study on the Characteristic and Challenges of
“Steps for Coding and Theorization” on a Study of Spirituality

Ichiro Kado, Keisuke Natsuaki

I. 研究の背景

1. 研究の動機

本研究は、質的研究の課題、特に、心の内を明確には表出できない人びとを対象とする難しさが動機となっている。そこで、心の研究として知られる、スピリチュアリティという側面から考察することにした。

スピリチュアリティは、世界保健機関の示す健康の定義改正案において関心を集め、身体的、心理的、社会的と並ぶ概念として、人間の心の中核にある根源的な概念と理解されている。この概念に対し、スピリチュアリティ研究では、スピリチュアルペインという痛みの概念から浮き彫りにすることが多い。そのため、生きる意味や存在の意味などの問いとして、死を前にした人びとの葛藤などが取り上げて模索される（藤井 2010：524）。また、臨床をともなう研究では、本人の言語的表出を中心として、質的研究を用いて多面的な分析が行なわれている。

一方、無意識的でありながらも、スピリチュアリティはすべての人間が有する概念と捉えられている。この視点は、認知症の人など、暗黙的様相の深い人

¹ 西南学院大学大学院人間科学研究科博士後期課程

への糸口でもある。また、本人と親身な者との間に生じる豊かな温もりやケアについても、スピリチュアリティの概念から説明することができると考えた。

例えば、認知症の人への、親身に寄り添う職員や家族によるケアでは、第三者からはほとんど意思表示とはとれないような些細な様相から、そのスピリチュアリティが繊細に共有されることがある。こうした臨床から考察するにあたっては、自然なやり取りや関係性などを加味しうる質的研究手法が求められた。

人間の主観的理解や内的世界の分析については、現象学をはじめとする質的研究の主な対象であり、理論的な視点を求めることができる。スピリチュアリティ研究において多面的な分析を求めるにあたっては、質的研究による理論的整理を踏まえる必要がある。そして、質的研究手法の近年の動向の一つとして、SCAT (Steps for Coding and Theorization) の柔軟に分析できる特徴は、重要な糸口として期待することができる。つまり、本研究では、本人の口頭データなどの明白な証跡を前提とした科学的であろうとする方法と、人間科学としてのスピリチュアリティ研究の理論についての関心を動機としている。

2. スピリチュアリティの暗黙の様相

スピリチュアリティの概念は必ずしも一様ではなく、定義は多様にあるが、共通して心の中核を示す概念として理解される。その中心的な特徴の一つに全体性と言う概念がある。全体性ⁱⁱは、スピリチュアリティが身体的、心理的、社会的、その他の具体的要因による影響を含みながらも、しかし、どのような特定の部分にも還元されない特徴として、人間存在そのものを示す概念である(岡本 2010 : 1) (Edward = 2014 : 132)。

しかし、スピリチュアリティの全体性を、研究やソーシャルワークの対象として扱うにあたっては一つのジレンマが生じることとなる。このジレンマについて、エドワード (Edward R.Canda) とレオラ (Leola Dyrud Furman) は、操作化ⁱⁱⁱという概念を用いて説明している。すなわち、直接観察され測定されうる現象に還元する操作化の概念自体が、特定の要因に還元することのできないスピリチュアリティの全体性の概念を侵してしまうとしている (Edward =

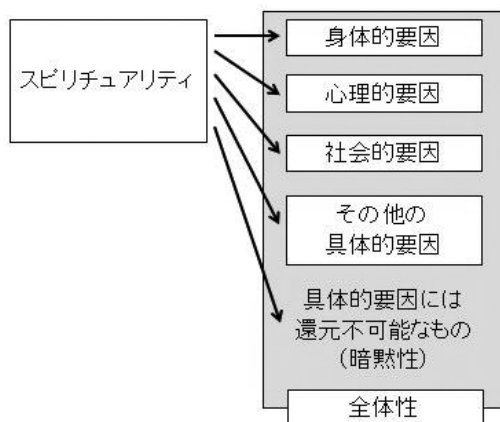


図1 スピリチュアリティの全体性

2014 : 137)。さらに、このジレンマに対して、「研究者やソーシャルワークの実践者は、衝動を直接観察することはできないとしても、深遠さ、意味、超越、統合性を求めて、いたるところで人間が活動している姿を観察すれば、衝動の存在を推測できるであろう。」という視点で、全体性の、特に暗黙の様相への現象学的な糸口を求めている (Edward = 2014 : 138)。

この視点は、本人が言語的に表出するいくつかの明白な要因、あるいは、それらから得られたカテゴリー以外の、暗黙の様相についても価値を認める必要性を示している。また、質的研究によって推測や帰納が得られる可能性についても触れている。一方、スピリチュアリティに関する先行研究では、言語的な表出が困難な人びとのスピリチュアリティを想定した研究はほとんど見られない。そのため、スピリチュアリティの全体性や暗黙の様相という視点に立つ質的研究の視点および手法が求められる。そこで、近年用いられている質的研究手法の一つ、SCATに焦点をあてて、特徴と課題を整理することから糸口を模索することとした。

Ⅱ. 研究の目的と視点

1. 研究の目的

本研究では、スピリチュアリティの暗黙の様相に対して、質的研究手法の考察を踏まえながら、SCATの特徴と課題について、整理、考察することを目的とした。特に、スピリチュアリティ研究で取り上げられやすい思考的な葛藤よりも、全体性や暗黙の様相への関心を中心に据えるため、現象学やエスノメソドロジーなどの理論からの糸口を模索し、SCATの特徴と課題を考察することとした。

2. 質的研究の理論的立場と SCAT への視点

質的研究という総称には、多様な立場をもった研究手法が含まれているが、共通的に、人や出来事を内側から理解することを目指す立場として、量的研究と対比して理解される。SCATの考察に先立って、質的研究の基本的な理論的立場を整理したい。

質的研究の多様な理論的立場について、フリック (Uwe Flick) は次の三つに整理している。一つ目は、現象学的考察や構造主義的思考などを由来として、個々人の主観的な意味づけを探る立場である。二つ目は、相互行為に潜む構造的な組織化や文脈等の、細部に宿る前もっての認識を除外せず、日常のありふれた行為やその産物を探るエスノメソドロジーの立場である。三つ目は、心理的社会的な無意識の過程に目を向け、客観的解釈学^{iv}等によって、構造主義的もしくは精神分析的に行為や意味の構造を求める立場である (Flick=2012: 67-77)。

一つ目の立場：現象学的立場について、さらに、普遍的洞察と存在解釈という理論的立場の違いを軸に、質的研究における現象学と解釈学の二つの大きな流れが整理される (小林 2015: 29-30, 41-42)。スピリチュアリティの研究について言えば、終末期を生きる人や特別なスピリチュアリティの痛みを持つ人を想定することが多く、一般的な同種の経験によって、普遍的な洞察をすることは必ずしも容易ではない。さらに、臨死や認知症などの暗黙の様相であるほど、存在解釈としての視点がより強く求められることとなる。そのため、ス

スピリチュアリティ研究において、現象学的立場は、研究者自身の深い洞察と解釈と伴うべき重要な視点として考察する必要がある。

二つ目の立場：エスノメソドロジーは、特異な出来事よりも、日常生活におけるルーティーンを取り上げて、相互行為が組織化される方法を明らかにする立場である（Flick=2012：72）。そのため、終末期を生きる人を、特異な状況と理解すれば適応することが難しい。しかしながら、認知症や終末期の人びとの生活を、日常生活や人生の延長線上に捉え、自明のものを環境や相互行為から読み解く視点に立てば、むしろ重要な視点として捉えることができる。

三つ目の立場：構造主義もしくは精神分析では、客観的な意味構造を構成するための客観的解釈学によって、解釈パターン、意味の潜在的構造、無意識的なプロセスや社会構造などを求める立場である（Flick=2012：75）。一方、暗黙の様相においては、客観的解釈学の方法としての口頭データ、表現、行為などを十分に確保することは難しい。そのため、研究者の解釈や洞察を加えるならば現象学と、あるいは、環境や相互行為などを証跡に加えて想定するならばエスノメソドロジーとの併用を求める必要がある。

このように、質的研究における三つの理論的立場は、スピリチュアリティ研究の暗黙の様相において必要となる視点を導いている。これらの視点を軸に、スピリチュアリティ研究という側面から質的研究の手法を考察する。そのうえで、SCAT の特徴を照らし、課題をとらえることとしたい。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究によって行う。文献研究においては、日本社会福祉学会研究倫理指針の規定を順守するとともに、文献の引用等については、人間科学論集の投稿規定補足に基づいて、厳密な倫理的配慮を心がけた。

Ⅲ. 考察

1. 現象学による暗黙の様相への解釈

質的研究の現象学的視点については、「個々の解釈がいかにして間主観的な納得（普遍的な認識）へと近づきうるかという方法的理論が不可欠」と西が示

すとおりの、同種の体験をもつ者どうしでの語り合いではなく、知らない相手との対等な議論とするための、認識の手続きが重要な証跡となる（小林 2015：41, 175-176）。質的研究の手続きでは、調査の録音、あるいは肌身に得たものなどを用いて、本人の主観的理論を導くための資料の再構成が行なわれ、この資料を証跡として分析の対象に、共通理解を求めていく手続きが必要となる（Flick=2012：80）。

スピリチュアリティ研究についても、臨床の繊細な空気感を通して、研究者自身が間主観的に納得する肌身の体験をもつ必要がある。また、親身な者の代弁を含む多様な時間的空間的文脈を通して、解釈を行なう必要がある。これらの洞察や解釈を再構成することで、証跡としての資料を導くことができる。臨死や認知症における主観的意味など、研究者自身に同種の体験を期待することが難しい臨床であっても、それでもなお、わずかに共有しうる体験的理解を肌身に得るためには、可能な限り本人と向き合い、間主観的共有を深くもつなど、研究者の親身な姿勢が重要となる。

こうして得られた間主観的納得を、他者に伝えるにあたっては、肌身に得た本質を導く丁寧な説明概念が不可欠となる。なぜならば、体験的理解や間主観的な納得に至るために必要な感覚を読み手にゆだねることなく、同種の経験が少ない読み手にも伝えることは、質的研究が客観的であるためにも必要な方法だからである。そのためにも、親身な者の視点や代弁などを活用し、説明概念を有効に用いる必要がある。

つまり、質的研究の現象学や解釈学に糸口を求めるならば、スピリチュアリティ研究の臨床で得たものに対し十分な説明概念を加える必要がある。それは、暗黙の様相の解釈や分析の要であり、これによって、整合性や反証可能性などを補って議論しうる研究とすることができる。さらに、説明概念を充実させることは、存在解釈を伴う解釈学的視点を、より普遍的洞察を伴う現象学的視点とすることができ、他者への議論を求めやすくなると考えられる。

2. 説明概念による時間的文脈へのエスノメソドロジー

一方で、研究者が暗黙的な様相の臨床から直接得られる肌身の感覚や解釈は、

本人の主観的世界観が生活や人生という延長線上に広く意味づけられるとき、ミクロな内省の視点が転じて氷山の一角となってしまう危険性も有している。特に、本研究がスピリチュアリティの全体性や暗黙性を念頭にしている以上、可能な限り臨床の輪郭を広く捉えた方法が求められる。解釈学の「時間性」や「歴史性」、エスノメソドロジーの文脈などの視点は、この危険性を補う視点として併用することができる。すなわち、現象学的視点で導いた資料、証跡を、多様な文脈上に置くことで、より全体性を見渡すことができると考えられる。

文脈については、質的な研究手法の基本的特徴として、空間的文脈と時間的文脈が挙げられている（日本福祉大学大学院質的研究会 2013：76）。暗黙の様相について考察するならば、空間的文脈は、本人が身を置く環境、及びその諸要素が持つ特別な意味や影響への配慮として捉えることができる。しかしながら、空間的文脈上に存在する無数の要素について、本人の視点と多様性を踏まえ、そのスピリチュアリティに深い意味を示す要素を取り出し、解釈することは容易ではない。

こうした空間的文脈に対して、認知症ケアの臨床では、本人の自宅での生活や習慣を観察し、または家族や友人など親身な者に聞き取りを行うなどによって、人生や生活の延長線として対比し、ケアを考察、実践することがある。つまり、空間的文脈の諸要素、および、当事者の視点を重視するためには、長期的な時間的文脈を求める必要がある。そのため、暗黙の様相についていえば、空間的文脈と当事者の視点は、時間的文脈から独立した特徴として整理するのではなく、併用する必要がある。

時間的文脈は、ひとつの物語の初めから終わりまでを示すような短期間の文脈から、研究の時点を生や歴史の延長線上に位置づけるような長期間の文脈まで、多義的に捉えることが出来る。エドワードとレオラが示すように、いたるところで観察するという視点は、この時間的文脈に求めることができるだろう。しかしながら、同様に暗黙の様相について言えば、長期的な文脈や、人となりや価値観を知りうるような、直接的な対話は困難であることが多い。そのため、研究者が共有した短期間の文脈から肌身で得たものは、諸証跡、説明概念の中に還元していくこととなる。この場合、研究者は、本人との時間的共有

を十分に持つことが必要となり、それは多ければ多いほど、確からしさを高めることができる。

一方で、認知症ケアなどの臨床から考察するならば、本人にとって特別な意味をもつ空間的、時間的な諸要素が、研究者が共有しうる時間的文脈の遙か以前に存在していることも珍しくない。例えば、認知症が生じる以前の生活や出来事の回想や価値観などの要素をあげることができる。この場合、研究者の共有した時間的文脈は、人生という長期的な時間的文脈上では、そのスピリチュアリティの全体性を説明するにあたって、十分に足るとは言いがたくなってくる。

このように、暗黙の様相を伴うスピリチュアリティ研究において、質的研究における時間的文脈へのエスノメソドロジーは、全体性を解釈するための重要な視点と考えることができる。そして、この時間的文脈を重視するにあたっては、研究者の直接肌身で得た文脈に加えて、親身な者たちによって共有された過去を含む長期的な視点を参考として、多面的な説明概念を用いる必要がある。

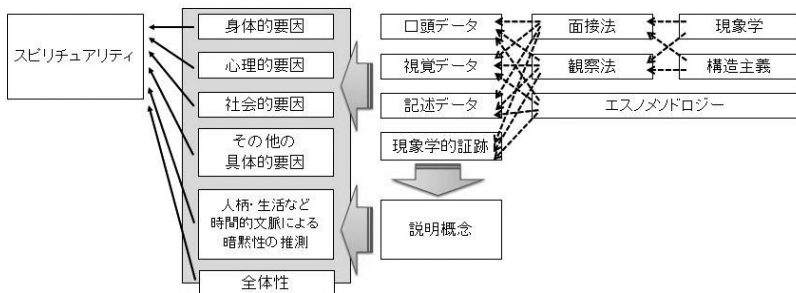


図2 質的研究の理論的立場と説明概念

3. スピリチュアリティ研究における SCAT の特徴

本人のインタビュー中の口頭データに、多くの要素が表出されるならば、主流な質的研究手法によって分析することができる。しかし、暗黙的な様相に、十分な口頭データを求めることは現実的ではない。また、臨床やインタビューの外で、あるいは、別の誰かの説明などから、その時は直接語られなかった背景に結びつくことがある。そして、それらが説明概念となり、時間的文脈や体

験的理解が、後から後から生じることがある。また、スピリチュアリティの研究では、前述のように、研究者の深い洞察や解釈を伴う現象学的視点、および親身な者の代弁などの説明概念を含む時間的文脈へのエスノメソドロジーの視点を、統合的に用いることを検討しなければならない。

こうした点について、SCAT は口頭データ外の説明概念を用いて整理できる点で優れている。さらに、説明概念を挟んで、口頭データ上から読み取れる主観的理論と、研究者が肌身で得た体験的理解などの解釈を、並べて記すことが出来る。

SCAT は大谷によって提案された質的分析、理論化の方法であり、分析手続きの明示化、分析過程の省察可能性と反証可能性の増大などの特徴を持っている。この手続きによって、ストーリーラインと理論記述を行い、分析を行う方法である。具体的な手続きは、音声記録の文字起こしを行ない、ひとまとまりごとに文に分ける。次に、その文に潜む内的現実や内的過程などを読み解きながら、着目すべき語句や文を抽出する。さらに、文中にはない概念や言葉によって文意を補い、これに説明を加える作業によって、浮き上がるテーマや概念の記入を行なう。こうした作業を全文に行ない、意味のつながりなどを整理しながらストーリーラインを記述する。そして、この分析から言えることを理論記

理論				構造主義、精神分析	エスノメソドロジー	現象学	
手法	面接法	面接法		面接法、観察法	エスノメソドロジー	観察法 エピソード記述	
証跡	口頭データ	口頭データ		左記口頭データの客観的解釈など	視覚データ、 記述データ、 フィールドノート、 代弁など	現象学的証跡 反省的証跡など	
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
				↓	↓	↓	
ストーリーライン(現時点で言えること)							
理論記述							
さらに追究すべき点・課題							

図3 SCAT に期待する統合的視点

述として整理する手法である。

調査結果としてのストーリーラインと理論記述に対しては、その検証や確認の可能性を補うことで、妥当性を示している。この点について、大谷は次のように説明している。「質的研究は、主観あるいは主体的解釈を積極的に用いるために、場合によってはきわめて恣意的なもの（・・・「公共性のある『主観』」ではなく「単なる独りよがりの『主観』」）になってしまう危険性も有している。しかし SCAT の表には、分析の過程が明示的に残る。そのため、自分の分析の妥当性確認（validation）のためのリフレクションを分析者に迫る機能も有している」（大谷尚 2011：157）つまり、分析の過程を明示することで、分析の妥当性を担保することとなる。

さらに、口頭データの他に、写真や映像、研究者のフィールドノートなど、多面的な証跡さえ、説明概念として用いる点については、エスノグラフィーの特徴を持って、研究者の体験的理解を示せる点ではエピソード記述の特徴も持つような応用も可能と思われる。こうした応用の可能性について具体的に示してはいないが、質的研究の統合的研究手法として期待することができる。

4. 暗黙的様相における SCAT の課題

スピリチュアリティの特に暗黙的様相という、他者との議論が難しい臨床について、可能な限り議論の素材を体系的にまとめる質的研究手法として SCAT の特徴を生かした研究が求められる。しかし、一方で、残された課題も多い。一つは、分析過程の明示こそが議論のための反証可能性を担保しているため、その省略や要約が難しい点である。これは、可読性や一目識別性などが低下するばかりではなく、誌面投稿上の規定や制限にも抵触しやすい。

もう一つは、分析の流れが、本人の口頭データを軸にしている点である。暗黙的な様相においては、本人の様相を説明する証跡としての口頭データは十分に確保することが難しい。この点については、テキストとして分析の対象に挙げられている項目を、観察データを含む再構成されたテキストとして用いるなどの応用が期待される。

IV. 結論

スピリチュアリティの主な臨床の一つとして想定されやすい死の臨床においては、その主観的世界と、さらにその後の、死後の世界に明確な境を求めることは難しい。そのため、様相が暗黙的になるほどに、その解釈は、文化的、宗教的、社会的、さらに時間的文脈上に求めるほかには、糸口を模索することは難しくなる。このような解釈を伴う現象学的視点について、それでもなお、可能な限り暗黙の様相に歩み寄り、議論の土台とするためには、説明概念を十分に取り入れた質的研究、およびその手法が求められる。

そのためにも、親身な者の代弁などを伴う説明概念を用いた時間的文脈へのエスノメソドロロジーや、現象学的視点を併せて用いる必要がある。SCAT は、その統合的手法として用いることが可能であり、大きな特徴として捉えるべきである。一方、いくつかの課題や改善の余地は残されているため、今後の応用が期待される。

参考文献

- 荒木正平 (2014) 「派生的暴力としての認知症高齢者のカテゴリー化－介護者の「語り」を手がかりに」『文化環境研究』 7, 30-38
- Canda, Edward R. and Furman, Leola Dyrud (2010) *Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping*, 2nd Ed., Oxford University Press. (=2014, 木原活信・中川吉晴・藤井美和翻訳『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か』ミネルヴァ書房.)
- Flick, Uwe (2011) *An introduction to qualitative research 4th edition.*, Sage. (=2012, 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子翻訳『新版 質的研究入門－<人間の科学>のための方法論』春秋社.)
- 藤井美和 (2010) 「スピリチュアルケアの本質－死生学の視点から」『老年社会学』 31 (4), 522-528
- 荻木まき子・杉本伸一・淵上克義・ほか (2015) 「小学校教務主任のリーダーシップによる協働的職場」『兵庫教育大学教育実践学論集』 16, 23-35
- 木原活信 (2003) 『対人援助の福祉エートス ソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ』ミネルヴァ書房
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ－質的実証研究の再生』弘文社
- 小林隆児・西研・竹田青嗣・ほか (2015) 『人間科学におけるエヴィデンスとは何か－

現象学と実践をつなぐ』新曜社

児玉理紗 (2015) 『保育者養成課程におけるエピソード記述の実践－保育実践の言語化の意味を考える』比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究

窪寺俊之 (2004) 『スピリチュアルケア学序説』三輪書店

鯨岡峻 (2005) 『エピソード記述入門－実践と質的研究のために』東京大学出版会

松葉祥一・西村ユミ (2014) 『現象学的看護研究－理論と分析の実際』医学書院

N.K.Denzin and Y.S.Lincoln (2000) Handbook of Qualitative Research 2nd edition., Sage.

(=2006, 平山満義・岡野一郎・古賀正義訳『質的研究ハンドブック 1巻－質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房.)

日本福祉大学大学院質的研究会編 (2013) 『社会福祉・介護福祉の質的研究法－実践者のための現場研究』太洋社

大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10 (3), 155-160

山浦晴男 (2012) 『質的統合法入門－考え方と手順』医学書院

ウォルデマール・キッペス (2009) 『スピリチュアルな痛み 薬物や手術でとれない苦痛・叫びへのケア』弓箭書院

-
- i 証跡、エヴィデンス、明証性など。本論文では、一定の理論をたどるための、臨床や考察の跡形をさしている。
- ii 全体性 (wholeness)。「スピリチュアリティは、どんな部分にも還元されない人間の特性を指している、と指摘する研究者は多い。これが全体性 (wholeness) としてのスピリチュアリティであり、それは、人間であることの真髄をあらわしている」(Edward 2014 : 132)
- iii 操作化 (operationalized)。「スピリチュアリティが操作化 (operationalized) されるかどうか、すなわち、直接観察され測定されうる減少に還元することができるのかどうか」(Edward 2014 : 136-137)
- iv 客観的解釈学。現象学的立場における主観的解釈学とは異なる。